

【講演会報告】

よみがえったナーナイの樹皮舟

(2007年度第1回講演会 日本文化人類学会北海道地区研究懇談会・北海道民族学会 共催)

佐々木史郎

開催日：2007年10月21日

開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309 教室

講師：佐々木史郎氏 (国立民族学博物館教授)

共催：北大文学研究科北方研究教育センター (第2回講演会)

樹皮舟の復元

2005年8月にナーナイの樹皮舟の復元製作を行ってもらった。これは国立民族学博物館の資料収集の一環であったが、それと同時に、1960年代以来途絶えていた樹皮舟制作の技術の現地での再興と伝承も目的としていた。この復元制作によって、この種のボートの構造と製作方法が判明したので、今回はそれを報告する。調査した地域はロシア連邦ハバロフスク地区ソルネチュヌイ地区コンドン村である。この村はアムール川の支流の一つゴリン川の流域にあり、先住民族ナーナイ (アムール川流域のツングース系の言語を話す民族の一つ) が暮らす村だが、ここのナーナイは言語、文化ともにアムール本流のナーナイとは若干異なっており、かつてはサマギールと呼ばれて別の民族とされたこともある。

樹皮舟の復元制作を行ってくれたのは、ヴェニアミン・ミハイロヴィチ・サマル (1940年生まれ) という人である。彼はゴリン川のナーナイの伝統文化、伝統知識をよく伝える人の一人で、ナーナイ語 (ゴリン方言) もよく話す。一度樹皮舟の復元製作をしたことがある。今回は樹皮舟の他に、犬ぞり、犬ぞりの索具、スキー、落下式罾、自動弓を製作してもらった。

シベリア・極東ロシアの白樺樹皮舟

レーヴィンとポターポフが編集したシベリア歴史民族誌表録 (Историко-этнографический атлас Сибири) によれば、シベリア、極東ロシアの先住諸民族の樹皮舟は次の3種類の系統に分類できる。

- a) エニセイ型：柳葉のような細長いボート、舳先と艫はとがる。主にエニセイ川流域、ニージナヤ・ツングースカ川、パドカーメンナヤ・ツングースカ川、オリョクマ川、ヴィチム川流域のエヴェンキに見られる。
- b) レナ型：エニセイ型同様舳先と艫が尖り、かつ先端部分が縫い合わされたように閉じられている。主にヴィチム川、オリョクマ川、レナ川流域のエヴェンキ、ヤクートに使われる



佐々木史郎氏



『皇清職貢図』巻三に見られるキヤカラ（ウデへの祖先）の白樺樹皮舟

- c) アムール型：舳先と艫の部分にホッケのスティックの形状をした材で閉じられ、かつ船内の一部がカバーで覆われる。アムール川流域のナーナイ、ウリチ、ネギダール、エヴェンキなどに見られるが、『皇清職貢図』によれば、かつてはウデへにもあった。

樹皮舟の材料

a) 胴体

白樺樹皮 (*talo*)。舳先、胴体、艫と3枚の白樺樹皮を使用した。いずれも幅1m以上あり、少なくとも直径40cm近い大木

から取られた樹皮であった。舳先の樹皮の長さは120cm、胴部は305cm、艫は150cmほどの長さの樹皮が用意されていた。それぞれ15cmほどののりしろが取られていた。火であぶる、熱湯をかけるなど、暖めると可塑性が高まる。

b) 骨組と材質

進行方向に沿って並べる底板は堅いカラマツ材、バネのような働きをしつつ船の形を丸く保つ肋骨材にはモミ、側舷部分と舳先、艫にもモミが使われる。

c) 木釘

白樺樹皮を挟み込む側舷に打ち込まれるのは、水に濡れるため金釘よりも木釘 (*tukki*) が用いられる。木釘の材は白樺である。

d) 接着剤

接着剤として使われるのは主に松脂 (*nuta*) である。モミやチョウセンゴヨウの幹ににじみ出て固まっている松脂を採取してとっておく。使うときには鍋に入れ火で暖めてとかしてからぬる。樹皮に塗った松脂をしっかり穴に押し込み、平らにのばすときには、熱した鉄板を当てる。冷えて固まると、しっかりと接着し、防水性も高い。ただし、熱に弱い。

e) 木工用接着剤

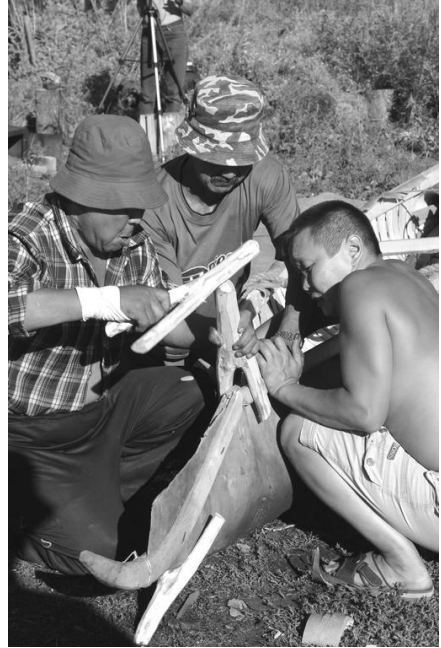
木釘を固定するのに木工用の接着剤 (*mo kamdoni*) が使用されたが、これはおそらく現代の技術だろう。

樹皮舟の製作方法

樹皮舟の製作工程を時系列に沿って整理すると、次のようになる。船体ができあがるまでに1週間、あとオールや床に敷く樹皮のシートなどの作成を入れると、10日間程度の時間がかかった。ただし、そこには材料となる白樺樹皮をはぐ作業や、松脂の採取は入っていない。白樺樹皮は5月末から6月初の青葉が芽吹いた時期が最もよいとされる。それは樹皮と幹の間に大量の水が流れて、樹皮が浮き上がるからで、その頃には樹皮のナイフを入れると自ら衣を脱ぐように樹皮がはがれるといわれる。今回の復元は8月に行ったため、樹皮を剥ぐ作業は観察できなかった。

- 1) 白樺の樹皮の手入れ（四角く成形し、樹皮表面のこぶや汚れをナイフで削り取る）。

- 2) 白樺樹皮の接着（3枚の樹皮を船の前を考慮して、溶かした松ヤニで張り合わせた）。
- 3) 船の側舷に当たる材で白樺樹皮を挟み、金釘で仮留めする（仕上げの段階で木釘に変えた）。
- 4) 進行方向に並べる底板を並べる。
- 5) その上から肋骨材（シュパンゴウト）を骨材と直角に並べる。肋骨材は両端を斜めに削って、側舷となる材と白樺樹皮の間に押し込むようにする。肋骨材はあらかじめお湯でゆでたり、火にあぶったりして暖めて柔らかくし、ある程度湾曲させておく。
- 6) 骨材を並べ終わると、肋骨材を折らないようにたわめながら、慎重にしかし一気に胴体を丸める。この時、船の断面図が下ぶくれ型になるように成形する。成形が終わると、戻らないようにひもを巻いて仮留めする。
- 7) 両側の側舷の材に長方形の穴を開け、横棒を通す。通された横棒は、側舷の上から木釘を打って留める。横棒を4本通し、固定することで、船の基本形ができあがる。
- 8) 舳先の成形を行う。舳先部分の丸まった白樺樹皮を、ホッケー状の棒で挟み、金釘を打ち込んで仮留めする（仕上げの時に木釘を打ち込んだ）。成形に際して白樺樹皮の可塑性を高めるために、熱湯をかけたり、松明であぶったりして暖めた。舳先部分を閉じた後、横に広げ、縦に折り曲げて、余った部分を切り取って、側舷の材とつなげる。この時、舳先の内側から補助材をあて、白樺の樹皮を挟み込む。
- 9) 艫も舳先と同様に成形する。舳先でも艫でも、成形に際して、白樺の樹皮が裂けることが多いために、その補修にかなりの時間を費やすことになる。
- 10) 艫と舳先の成形が終わると、船内の舳先と艫に近い三角形のスペースを白樺の樹皮でカバーする。
- 11) 胴部の樹皮に穴がないか、樹皮のつなぎ目に隙間がないか確認し、見つければ松脂を塗って補修する。穴が大きい場合には白樺樹皮を当てる。
- 12) 船を持ち上げ、船底を白樺の松明の火で軽くあぶる。オール類も同様にあぶる（これには儀礼的な清めの意味と、塗った松脂の定着を図る実際の機能とがある）。
- 13) 川に持ち出して進水する。浸水部分があれば補修する。



樹皮舟に舳先をつける(コンドン村にて)

樹皮舟の使い方

この樹皮舟の推進力は、基本的にはカヤックのような長い1本のオールで交互に水をかくことによって得られる。このボートは細身なので川をさかのぼるときにも、この種のオールで強い推進力が得られる。それに対して、岸边近くによって、水辺から獲物に音を立てないように接近する際には、へら状の短いオールか竿が使われる。両者とも2本1組で、両手でもって水をかくか、川底を押す。ヘラジカやノロジカ、アカシカ（ゴリン川流域では少ない）は川の



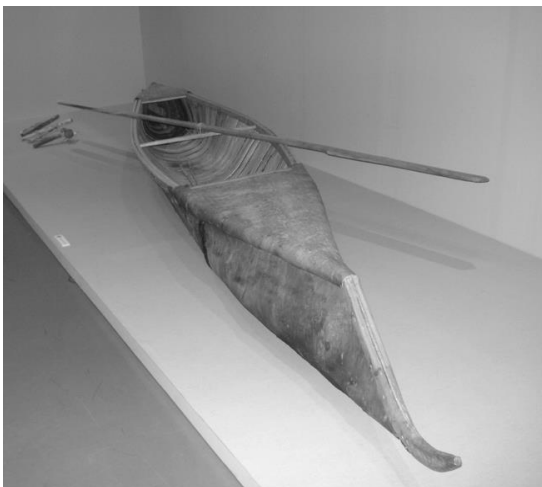
樹皮舟の進水（コンドン村にて）

ヘラジカ猟で行われていた。沿海地方のウデヘではこのような猟専用の丸木舟が現在でも制作され、利用されている。ゴリン川のナーナイでは、現在は丸木舟も樹皮舟も廃れてしまったために、幅の広いモーターボートのモーターを止めて行うしかない。寸胴のモーターボートでは水辺から動物に接近とするという微妙な技がやりにくいために、このような猟師の技量が光る猟も廃れてしまった。

樹皮舟の評価

今回製作した樹皮舟はヘラジカ 1 頭分ほどの獲物ならば運べる大型のボートで、荷物を載せなければ、2 人乗りも可能である。しかも、この樹皮舟はその場しのぎの簡易ボートではなく、補修すれば何年も使える耐久性のあるボートである（とはいっても樹皮なので丸木舟や構造船に比べれば強度は落ちる）。揺れたときの復元性が高く、操船も安定している。手こぎなので静かであり、獲物に接近するときには有利である。実際、手こぎでボートを操船している間、すぐ近くまで接近しているにもかかわらず、カモは全く動じていなかった（カモはだいたいにおいて鈍感だが）。

他方で欠点もある。舳先、艫の両端がとがっているために船外機を取り付けることができない。また、樹皮製なので船体が軽く、重いモーターや燃料タンクを積むとバランスが崩れてしま



国立民族学博物館に収蔵・展示された樹皮舟

岸辺近くに生える長い水草をえさとして好む。このような動物は普通夜行性で、えさをあさるのは真夜中や早朝が多い。漁師は銃（昔は弓矢）と懐中電灯（かつてはなかった）を持ち、鹿が水草を食べるピチャピチャという音を頼りに、静かに風下から接近し、十分近づいたところで、懐中電灯の光を当て、それに驚いて鹿が頭を上げた瞬間に銃で撃ち取る。

このような猟は現代でも極東ロシアの先住民族やその他の猟師の間で広く行われているが、ゴリン川のナーナイたちの間でも

しまう。そのためにモータリゼーションには適合せず、1960 年代以降、ソ連政府のモータリゼーション推進政策もあって、急速に廃れてしまったようである。

しかし、全体としては白樺樹皮の性質を知り尽くした樹皮製品であり、北方ユーラシアの白樺樹皮文化の粹といっても過言ではないだろう。この舟の制作のよってゴリン川のナーナイの樹皮文化が着実に次の世代に継承されることが望まれる。

（ささき・しろう／国立民族学博物館教授）